



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

マーフィーの「エンドゲーム」：
もう一度終わるために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内海, 智仁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/4603

マーフィーの「エンドゲーム」

—— もう一度終わるために ——

内海 智 仁

(2005 年 11 月 28 日受理)

Murphy's "Endgame": For to End Yet Again

Tomohito UTSUMI

The memory came faint and cold of the story I might have told, a story in the likeness of my life, I mean without the courage to end or the strength to go on.

(Beckett, "End" 70)

サミュエル・ベケット (Samuel Beckett, 1906-89) の語る最初の長篇小説『マーフィー』 (*Murphy*, 1938) は、第 11 章のチェス・ゲームで (アンチ・) クライマックスをむかえる。図面こそないものの、43 手の全棋譜が、語り手による (a) ~ (r) の 18 個の注付きで、3 ページにわたって示されている (136-38)。(* *Murphy* 英語版からの引用は、以下すべてページ数のみで示す。) 批評家 Hugh Kenner は『マーフィー』について、おそらく最初の読者参加型小説であり、十分に理解するためには、実際にそのチェス・ゲームを盤に並べてみなければならない、と述べている (“*Murphy... may be the first reader-participation novel. Fully to get the hang of it, you must set pieces on the board when you are part way through Chapter 11 and work out a chess game.*”[Kenner, *Reader's* 57])。以下に、いくつか局面図を使いながら、このゲームで何が起きているかを見ていくことにする。

対局者は、マーフィー (Murphy) とエンドン氏 (Mr Endon)。ダブリンを捨て、ロンドンへやって来た主人公マーフィーは、郊外の精神病院で住み込み看護人として働いている。相手のエンドン氏は、患者のひとりであり、対局場所は彼の独房の中。これがマーフィーの人生最後の夜となる。

チェスでは、白（先手）と黒（後手）がそれぞれ1度指して、一つの「手」(“move”)、1手と数える。この対局は43手で決着がつく。

<i>White</i> (Murphy)	<i>Black</i> (Mr Endon)
1. P—K4	Kt—KR3
2. Kt—KR3	R—KKt1
3. R—KKt1	Kt—QB3
4. Kt—QB3	Kt—K4
5. Kt—Q5	R—KR1
6. R—KR1	Kt—QB3
7. Kt—QB3	Kt—KKt1
8. Kt—QKt1	Kt—QKt1
9. Kt—KKt1	P—K3
10. P—KKt3	Kt—K2
11. Kt—K2	Kt—KKt3
12. P—KKt4	B—K2
13. Kt—KKt3	P—Q3
14. B—K2	Q—Q2
15. P—Q3	K—Q1
16. Q—Q2	Q—K1
17. K—Q1	Kt—Q2
18. Kt—QB3	R—QKt1
19. R—QKt1	Kt—QKt3
20. Kt—QR4	B—Q2
21. P—QKt3	R—KKt1
22. R—KKt1	K—QB1
23. B—QKt2	Q—KB1
24. K—QB1	B—K1
25. B—QB3	Kt—KR1
26. P—QKt4	B—Q1
27. Q—KR6	Kt—QR1
28. Q—KB6	Kt—KKt3
29. B—K5	B—K2
30. Kt—QB5	K—Q1
31. Kt—KR1	B—Q2

- | | |
|--------------|---------|
| 32. K—QKt2!! | R—KR1 |
| 33. K—QKt3 | B—QB1 |
| 34. K—QR4 | Q—K1 |
| 35. K—R5 | Kt—QKt3 |
| 36. B—KB4 | Kt—Q2 |
| 37. Q—QB3 | R—QR1 |
| 38. Kt—QR6 | B—KB1 |
| 39. K—QKt5 | Kt—K2 |
| 40. K—QR5 | Kt—QKt1 |
| 41. Q—QB6 | Kt—KKt1 |
| 42. K—QKt5 | K—Q2 |
| 43. K—R5 | Q—Q1 |

And White surrenders.

(136-37)

図 1 は開始局面 (“initial distribution”)。白がマーフィー。注 (a) にあるように、エンドン氏は常に黒 (後手番) を選んだ (“Mr Endon always played Black. If presented with White he would fade, without the least trace of annoyance, away into a light stupor” [137])。

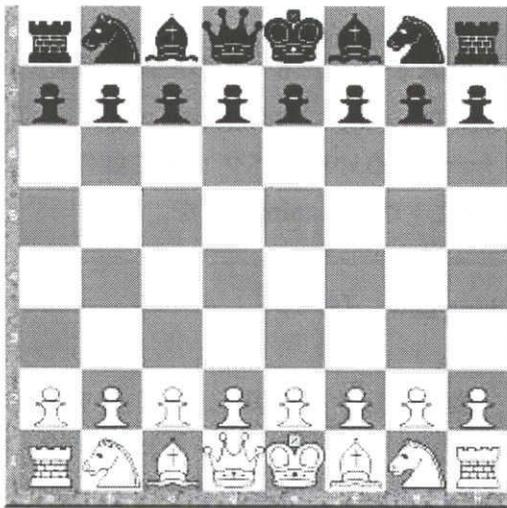


図 1 開始局面

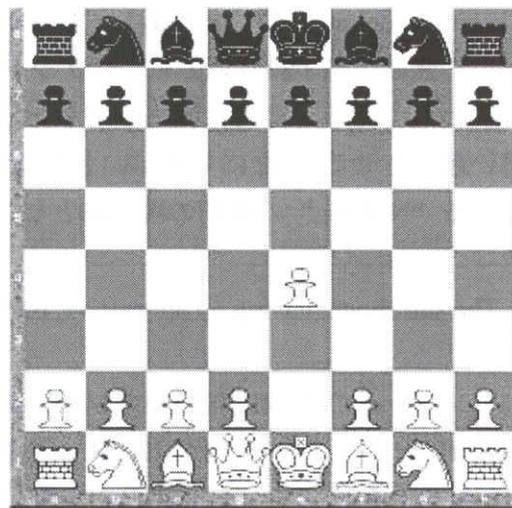


図 2 1. P—K4 まで

白マーフィーの最初の指し手は、P—K4 (図 2)。注 (b) は、ポーンを進めたこの初手が「白の難局になった根本的原因」だと指摘する (“The primary cause of all White’s subsequent difficulties” [137])。

マーフィーにとって（そして読者にとって）驚くべきことに、実はこれが、このゲームの事実上の敗着となるのだ。

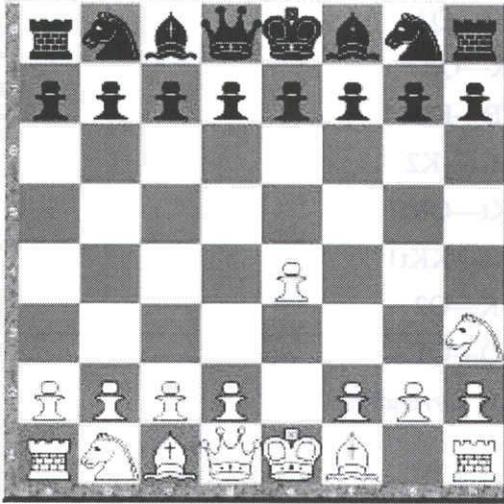


図3 8...Kt—Qkt1 まで

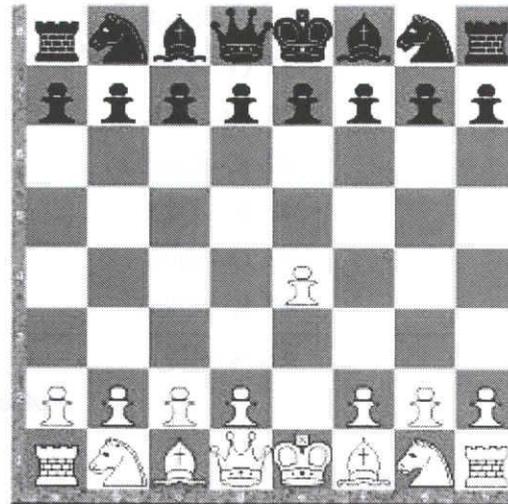


図4 9. Kt—KKt1 まで

図3は、8手目黒（エンドン氏）が Kt—Qkt1 とナイトを引いたところ。黒の全駒は、ここで再び元の位置、すなわち図1の配置に戻ったわけである。無限に反復・継続することも可能な手順の1サイクル。注(d)は、このオープニングを“An ingenious and beautiful debut” (137) と賞讃している。

この無限循環・繰り返しは、ベケット最初の小説『マーフィー』の名高い最初の一文（終わりであると同時に始まりでもあることを示す、あの“the nothing new”の一文）を想い起こさせる。「なにも新しいものは無い」——あるいは、ベケット生涯のモチーフとなる“Nothing”の最初の現われとしての、「新しい無(“nothing”）」を。

The sun shone, having no alternative, on the nothing new. (5)

エンドン氏の作戦に気づいたマーフィーは、黒の指し手を真似し、続く白9手目で Kt—KKt1 とナイトを引くが（図4）、白第1手（図2）の局面に戻ったに過ぎず、企ては不完全に終わった。ポーンという駒は、チェスにおいて、後退することができない唯一の駒である。開始局面に戻るゲームという面では、白マーフィーが最初にポーンを進めた手が、既に取り返しのつかない、敗着とも言える手だったわけである。

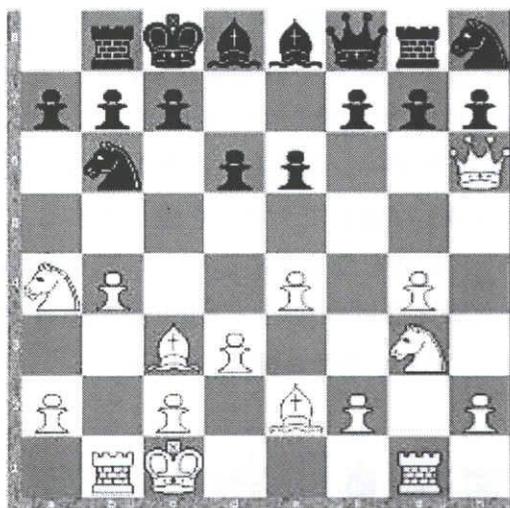


図 5 27. Q—KR6 まで

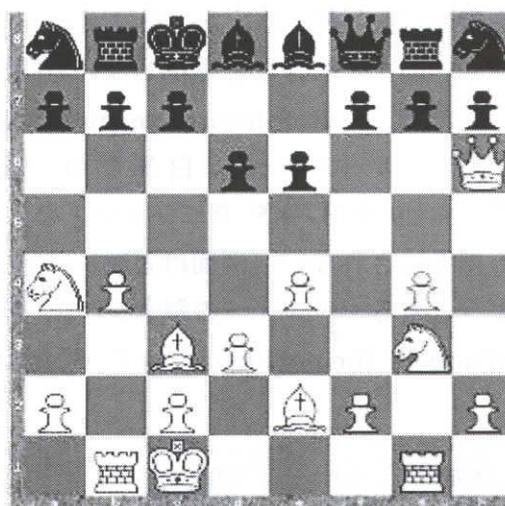


図 6 27...Kt—QR1 まで

その後、戸惑うマーフィーをよそに、エンドン氏は相変わらず自分の世界だけの駒繰りを続ける。図 5 は、業を煮やしたマーフィーが、白 27 手目で Q—KR6 と、最強の駒クイーンを相手のポーンにぶつけたところ。ただでクイーンを捨てようという、通常では考えられない無謀な手である。注 (j) は、これを “The ingenuity of despair”(137) と評している。

ところが、エンドン氏はマーフィーの絶望的体当たりには目もくれず、Kt—QR1 とナイトを元の位置に戻すのだ。この時 (図 6)、黒の駒の布陣が、チェス盤中央の縦軸に関して線対称を成していることに注目してほしい。Neil Taylor らはこれを “endon-symmetry” と呼んでいる (Taylor and Loughrey 85-86)。「エンドン」(“endon”)は、ギリシア語で「内部」(“within”)の意。内に閉じこもるエンドン氏が、チェス盤という小宇宙の中に自分の駒でかたちづくるシンメトリーである。

なお、シンメトリーへのこだわりは、ベケット作品の特徴のひとつでもある。例えば、“M”。“M”という文字へのベケットの偏愛はよく知られている。主人公を含む登場人物の多くは、“M”で始まる名前をもっている。“Molloy”、“Malone”、“Moran”、“Mahood”、“Macmann”、そして“Murphy”。その理由のひとつは、“M”という字形の対称性に求められるだろう。「エンドン・シンメトリー」と同様に、中央の縦軸に関して線対称のかたちをしているのだ。また、“M”は、アルファベット 26 文字のうち 13 番目 (13/26) の文字であり、全体をちょうど二分するものとなっている。ちなみに、マーフィーの現勤務先 (そして対局場所) である精神病院の名称は、“the Magdalen Mental Mercyseat” (略称 “MMM”; フランス語訳では、もうひとつ “M” の多い、“M.M.M.M.”) である。作者の意図は明白であろう。

対局に戻ろう。エンドン氏は、クイーンのただ取りよりもシンメトリーの形成のほ

うを選んだ。いや、エンドン氏はマーフィーの駒や手には無関心であり、彼の目にはマーフィーのクイーンなど存在しないも同然なのだ。おそらくその意味において、注 (k) は、ここで、“Black has now an irresistible game” (137) と判定しているのであろう。

続いてマーフィーは、白 28 手 Q—KB6 で再度クイーンを取らせようとするが果たせず、白 29 手 B—K5 でビショップを、白 30 手 Kt—QB5 でナイトを差し出すも、どれも相手にされない (図面は省略)。エンドン氏の注意をひくために何としても駒損をしようとするマーフィーの執念を、注 (l) はただ讚えるほかない (“High praise is due to White for the pertinacity with which he struggles to lose a piece” [137])。

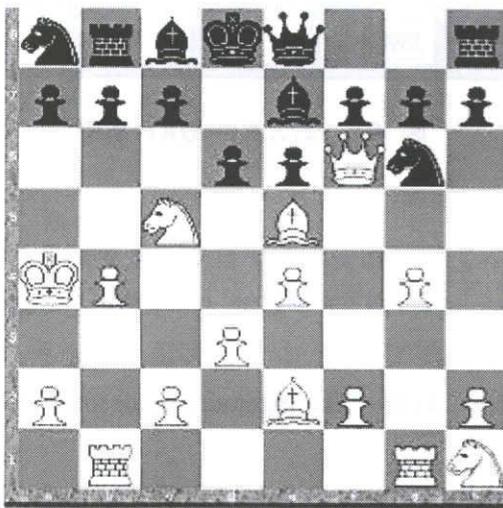


図 7 34...Q—K1 まで

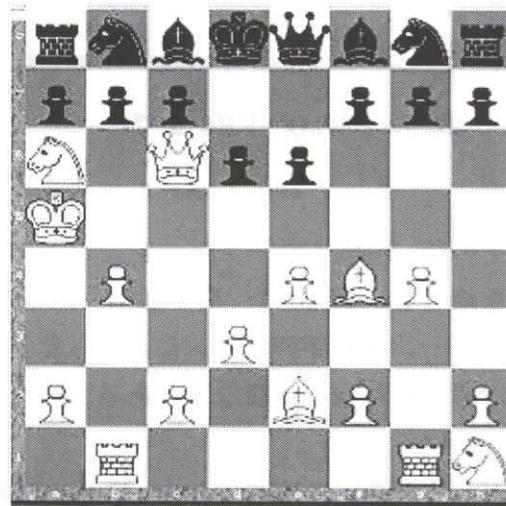


図 8 41...Kt—KKt1 まで

どうしようもなくなったマーフィーは、白 32 手 K—QKt2!! から、キングをひたすら前線の危険地帯へ進めていく。図 7 は、その結果、黒 34 手目 Q—K1 で、黒のクイーンにより白のキングに初めて「チェック、王手」 (“check”) がかったところ。しかし、これは、単なる偶発的の事故であったようだ。注 (o) にあるように、黒エンドン氏は、自分が王手をかけていようがその逆であろうが、全く関知しないのだから (“Mr Endon not crying ‘Check!’, nor otherwise giving the slightest indication that he was alive to having attacked the King of his opponent, or rather vis-à-vis....” [137])。

あきらめきれないマーフィーは、白 38 手 Kt—QR6 と、またナイトの押し売りを試みるが、やはり、エンドン氏はそれには構わず、黒 39 手目 Kt—K2 で再び「エンドン・シンメトリー」を完成させる。右往左往するだけの白のキングだが、最後に (白 41 手目 Q—QB6) クイーンをもう一度ぶつける。絶望的体当たりも効なく、エンドン氏は、黒 41 手目 Kt—KKt1 で、またも、シンメトリーを盤上にかたちづくることに成功する。図 8 の局面である。図 6 とかたちは同じだが、黒駒の位置が開始位置 (図 1) に、よりいっそう近づいていることが分る。中央のポーン (ポーンは後退できない) 2

つを除けば、キングとクイーン的位置が左右入れ替わっているだけなのである。

対するマーフィーの方はもはや收拾がつかない状態に陥っており、なすすべがない。

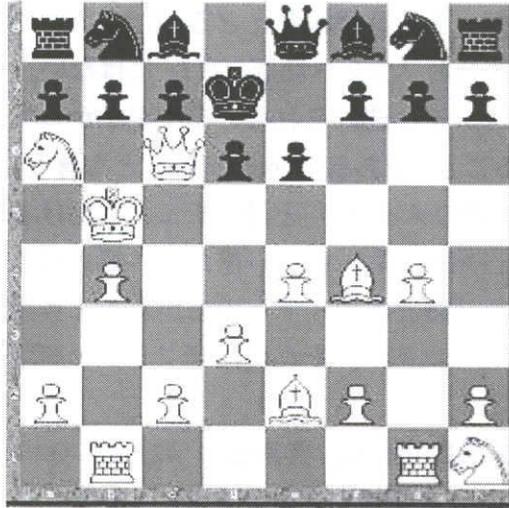


図 9 42...K—Q2 まで

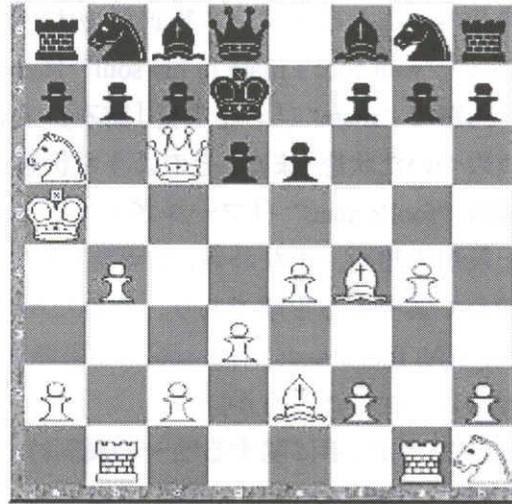


図 10 43...Q—Q1 まで

エンドン氏は、いよいよキングとクイーンの入替えにかかる。黒 42 手は K—Q2 (図 9)。キングが相手クイーンに体当たり。実戦では意図して指すことのありえない手であり、うっかり指したとしても、本来、即座に負けのはずだ。エンドン氏にとって、白マーフィーの指し手は、自分の順番が来たことを示すためだけにあるかのようだ。駒を取ることはそもそも考えの中にない。この盤上のゲームは、エンドン氏による「一人遊び」(“solitaire”) なのだ(注 (q): “The termination of this solitaire is very beautifully played by Mr Endon.” [138])。そしてエンドン氏は、その名のとおり、なおゲームを続ける (“Endon” は “end + on” [終わり・続ける] でもある)。

図 10 は 43...Q—Q1 まで (終了図)。これ以上の続行は無駄と観念し、白マーフィーが投了した局面 (注 (r): “Further solicitation would be frivolous and vexatious, and Murphy, with fool’s mate in his soul, retires” [138])。

本局でエンドン氏は、相手の駒を取ることやキングを詰めることとは無縁に、「自分の駒でシンメトリーをつくり出すこと」そして「できるだけ元の位置に駒を戻すこと」にひたすら熱中・専念してきた。図 10 の後、白 44 手目にマーフィーがたとえどんな手を指そうとも、エンドン氏が黒 44 手目 [K—K1] と指す (キングを開始位置に戻す) であろうことはもはや疑いようがない。「エンドン・シンメトリー」—— しかも、(2つのポーンを除く) 14 の駒が完全に開始時の配置に戻るといふ、純度の高さでの ——。

それで、マーフィーは、次手を指すことなく、43 手で投了した。チェスでは、「終盤」のことを「エンドゲーム」(“endgame”) と呼ぶ。それにしても、なんと奇妙な終わ

り、なんと孤独な「エンドゲーム」だろう。

なお、小説『マーフィー』は、最初に英語で書かれ 1938 年に出版、その後ベケット自身の手になるフランス語訳が 1947 年に刊行、という経緯をたどるのだが、この注 (r) 中の “with fool’s mate in his soul” にあたる部分がフランス語版 (217) にはない。チェス用語で “mate” (「メイト」、「詰み」) とは、「キングに逃れられない王手がかかって、勝負のついた状態; また、そのような状態にすること」である (“checkmate” とも言う)。問題の “fool’s mate” (「フールズ・メイト」、「愚者のメイト」) とは、チェスにおける理論上最短の詰め、すなわち、2 手詰めのこと。当然ながら、白の「愚かな」協力があって初めて実現する手順であり、それだからこそ、「愚者のメイト」の名がある。英語版での “with fool’s mate in his soul” の意味するところは何か。それがなぜフランス語版では省略されたのだろうか。

また、指し手に関する唯一の異同は、黒 42 手目である。英語版の 42...K—Q2 (図 9) が、フランス語版 (216) では、42...K—K2 (表記法が異なるため、“Re7”) となっているのだ。単に 42 手での「反則」負けを避けるための修正なのか (もっとも、マーフィーにはこの「反則」を咎める気など毛頭なく、ゲームは続いているのだが)。

この 2 つの改訂・異同の理由を探るために、フランス語版に沿って、予想される (しかし指されないまま終わった) 44 手目を並べてみよう。

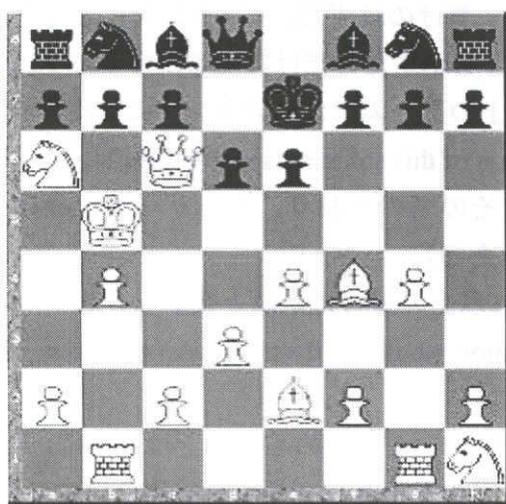


図 11 [44.K—QK1] まで

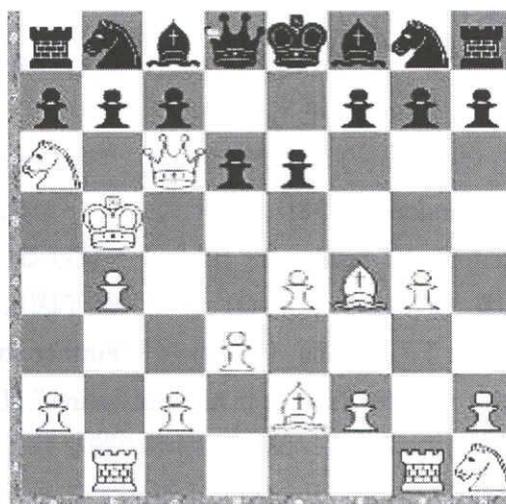


図 12 [44...K—K1] まで

フランス語版を指し継いで、仮に (大いにありそうなことだが)、マーフィーが白 44 手目に [K—QK1] とキングを寄ったとしよう (図 11)。この時点では、黒のキングも白のクイーンに当たっておらず、ゲームは「反則」もなく進行している。ところが、黒 44 手 [K—K1] の局面 (図 12) を見よう。黒エンドン氏のキングは、ねらいのシン

メトリーを完成させると同時に、白のクイーンの利きにとびこみ討ち死にしている。この図を頭に描いたマーフィーは、とうとう、いわば「最後の」終わり（妙なことばだが）が来たことを悟り、続行するだけの気力を失ったのであろう。フランス語版では、指し継いだ場合、黒 44 手 [K—K1] で、「シンメトリー」と「メイト（詰み）」—— 完成と死が同時におこるようにしてあるのだ。英語版と違い、黒 44 手目で初めて黒のキングに王手がかかるようにして、劇的效果を高めて。もっとも、その手は、結局、指されないうまま終わるのだが。

さて、フランス語版で省略された “with fool’s mate in his soul” (138) について。

ひとつの意味は、すでに見たように、白第 1 手 P—K4 (図 2) が、「エンドン・シンメトリー」づくりから外れるおおもとなる敗着だったという事実についての、マーフィーの感慨であろう。「フールズ・メイト」、「愚者のメイト」ならば、まだそれでも 2 手詰めなのだが、自分は 1 手で詰められたも同然だという思いを込めて。この場合の “mate” は無論、チェスの「メイト」、「詰み」の意。

もうひとつの意味はおそらく、「仲間、連れ合い、相補う二つのうちの一つ」という意の “mate” と解釈して、“fool’s mate” を「愚か者の仲間」ととることであろう。マーフィーの魂の中の友とは、エンドン氏のこと。病院の “inmate” 「患者、被収容者」であるエンドン氏は、“mate” という語を近いものにするのではないか。この “inmate” という単語は、語源的には “dwelling within” (「中に住んでいる」) の意で、古くは、広く「同居人、居住者」をも意味した。「愚かにも 1 手で負けた男 (マーフィー) の友 (エンドン氏)」ということ。さらに考えれば、「愚かにも (エンドン氏のことを) 友であると誤解している」マーフィーを、語り手が皮肉っているともとれるだろう。

一方、エンドン氏について言えば、「メイト」、「詰み」の意味でも、「仲間」、「友」の意味でも、どちらの意味においても、マーフィーはエンドン氏の (文字どおり) 「眼中にない」。第一に、エンドン氏は、黒 34 手目 Q—K1 (図 7) で相手に王手がかかるときも、黒 42 手目 K—Q2 (図 9) で (そして予想される黒 44 手目 [K—K1] でも) 自分のキングを相手の駒の利きに動かすときにも、「詰み」には全く無関心だった。第二に、エンドン氏が、マーフィーの期待や願望にもかかわらず、友になりえないということは、対局直前の描写でもすでに明言されていた。

Mr Endon would have been less than Mr Endon if he had known what it was to have a friend [. . .] the sad truth was, that while Mr Endon for Murphy was no less than bliss, Murphy for Mr Endon was no more than chess. (135)

エンドン氏の視野には、「詰み」も勝敗も無く、「友」も対戦相手も無い。ふたり相対していても、エンドン氏がしているのは「一人遊び」 (“solitaire”) であり、そうである以上、向かい合うマーフィーのほうも実は、意に反して、「一人遊び」をしてきたこ

とになる。ふたりは、同じ盤の上でそれぞれが、かわるがわる順番に、「一人遊び」をしていたのだ。

以上のような、かなり込み入った意味内容が、“with fool’s mate in his soul” という語句には含まれていると考えられる。逆説的だが、まさにそのことが、注 (r) 中の “with fool’s mate in his soul” にあたる部分がフランス語版で欠落している理由であろう。英語版での “mate” にまつわる、こうした地口・多義性を十分に翻訳することは、ベケットの力をもってしても難しかったと、推測される。チェス用語としての “fool’s mate” が必ずしも一般的なことばでないことも考慮して、注 (r) から削除した。その一方で、「ゲームの終わり」・「エンドゲーム」をより際立たせるために 42 手以降を再検討し、その結果が、黒 42 手目の修正になったのではなかろうか。フランス語版での 2 つの改訂は、互いに関わりあっており、このチェス・ゲームの特性をよくあらわしていると思われる。

ひとり着々と「エンドン・シンメトリー」の完成にいそしむエンドン氏に対して、マーフィー（その名 “Murphy” は、「形」を意味するギリシア語 “morphē” に由来する）は、「変幻自在」というよりも「混乱」ということばがふさわしい、收拾のつかなくなった盤面を前に、駒を投じるよりなかった。

このチェス・ゲームの後まもなく、マーフィーは、屋根裏部屋の揺り椅子（彼の “Mercyseat”）の上で、ガス爆発のため死亡する。「ガス」（“gas”）の語源（ギリシア語の “chaos”：「混沌」も意味する）を思い起こすと、彼にふさわしい象徴的な死だと言えよう。この語源は、以前第 9 章で、マーフィーの頭に浮かんでいたものである。

And the etymology of gas? Could it be the same word as chaos? [. . .] for him henceforward gas would be chaos, and chaos gas. (100)

語り手は、ガス漏れの記述の際、読者にもう一度念押しをしている (“excellent gas, superfine chaos” [142])。マーフィーの生涯は、「混沌」・「ガス」により幕を閉じるのだ。

（ひとつ付言すれば、“gas” には、「冗談」、「楽しみ」の意もある。OED は “gas, n. 1” の項 “5. c” で、“Fun; a joke. Anglo-Irish slang.” と説明している。文例のひとつは、ジェームズ・ジョイス [James Joyce, 1882-1941] の *Dubliners* [1914] からとられている。「冗談」で終わるといってもまたいかにもベケット的なエンディングである。）

著者ベケット自身のチェス好きは相当なもので、チェス・マニアとして有名な画家マルセル・デュシャン (Marcel Duchamp, 1887-1968) とは、1930 年代 (『マーフィー』執筆・翻訳と同時期) のパリで、よく対戦していたらしい (Knowlson 276)。デュシャンはチェス研究書 (「エンドゲーム」についての本) も出している (*L'Opposition et Cases*

Conjugees sont Reconciliées [1932 年])。

イングマル・ベルイマン (Ingmar Bergman, 1918-) 監督の映画『第七の封印』(*Det sjunde inseglet*, 1956) には、騎士と死神のチェスという、印象深い場面がある。作品内でチェス・ゲームの占める重要性において、小説『マーフィー』はこの映画にも優るだろう。その上、ベケットについて言えば、チェスの役割は、この作品内だけの特異なものでは決してないのである。

チェスは、終わる(終わりの)ゲーム、終わるためのゲーム、終わりが肝心なゲームである。「終わる」ことをチェスにおいて集約的にあらわすのが、「エンドゲーム」。だからこそ、チェス、とりわけ、「エンドゲーム」のモチーフは、ベケットの作品群全体を通して特徴的なもののひとつとなったのだろう。

しかも、ベケット作品は、「終わる」といっても、終わりに向かって単純に直線的に進むのではない。「終わる」といいながら始まり、「始める・続ける」といいながら終わる、という構造をもつことが多いのだ。いくつか例を挙げよう。

『マーフィー』の最初の一文はすでに見た。他にも、例えば、短編 “The End” (題名も「終わり」: フランス語版 1954 年、英語訳 1967 年) の最後の一文 (本論文の冒頭にすでに引用) は、語りえたかもしれない物語の記憶がもどってきたこと (始まり) を告げて、終わる。最初の戯曲 *Waiting for Godot* (フランス語版 1952 年、英語訳 1954 年) は、出発をうながす台詞 (と動こうとしない役者たち) で幕となる。「もう一度終わるために」という題名をつけられた短編 (“For to End Yet Again”: フランス語版 1975 年、英語訳 1976 年) の最後の二文もまた、印象的である。

No for in the end for to end yet again by degrees or as though switched on dark falls there again that certain dark that alone certain ashes can. Through it who knows yet another end beneath a cloudless sky same dark it earth and sky of a last end if ever there had to be another absolutely had to be.

(Beckett, “For to” 181-82)

また、ベケットが、彼の作品の朗読・演技で知られる Jack MacGowran (1918-73) と、朗読パフォーマンスのための、さわり集を編んだとき、その本は *Beginning to End* (『終わり始める』) と名づけられている。

小説『マーフィー』において、チェス・ゲームは、物語の中の小さな物語、一種の劇中劇・小宇宙の効果をあげていた。ベケットの全戯曲中で、「エンドゲーム」が最も明瞭に舞台化されたのが、その名も *Endgame* (フランス語版 1957 年、英語訳 1958 年)。ベケット劇の代表作の一つである。

「終わりだ、ほとんど終わりだ」という Clov の第一声で始まる。

Finished, it's finished, nearly finished, it must be nearly finished.

(Beckett, *Endgame* 1)

それに呼応する Hamm の最初の台詞中のことば (“Yes, there it is, it's time it ended and yet I hesitate to — [...] — to end.” [Beckett, *Endgame* 3]) もまた、この芝居が、典型的なベケット作品——「終わることについての劇」、「終わる(終わりの)ゲーム」——であること、そして、「終わり」と「始まり」とが切り離せないものであること、を明確に示している。「終わり・続ける」という主題を、Hamm の次の台詞が、最も簡潔・的確に言い表す。

The end is in the beginning and yet you go on.

(Beckett, *Endgame* 69)

なお、演劇とチェスとの結びつきは少々唐突な感じがするかもしれないが、実はそうではない。

ひとつだけ実例を挙げよう。先の Clov の第一声は、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) 作 *The Tempest* (1611 年初演; シェイクスピア最後の戯曲) にある Prospero の台詞 (第 4 幕第 1 場) を想わせる。フォックスらによれば、シェイクスピアには「全戯曲の中でチェスへの言及が 4 回しかない」(フォックス & ジェイムズ 134) のだが、そのうちの 하나가、『テンペスト』の最後の場面 (第 5 幕第 1 場)——Prospero の娘 Miranda と、ナポリの王子 Ferdinand とのチェス・ゲームなのだ。考えてみれば、“board” (板、ボード、盤) の上の “play” (芝居、勝負、遊び) であってひとつの小宇宙を成す、という面で、演劇とチェスとは互いによく似ている。シェイクスピア劇のように、王 (キング) がかわれば、なおのことだ。

1950 年代の戯曲まで待たなくても、ほとんど戯曲に近づいているものが、ベケットの作品の中に実はある。それは他でもない『マーフィー』の一節である。投了後の愕然・呆然としたマーフィーが描かれる場面。エンドン氏の目に映るマーフィーの像。しかし、マーフィーはエンドン氏の見られてはいない。

‘the last at last seen of him
himself unseen by him
and of himself’

A rest.

‘The last Mr Murphy saw of Mr Endon was Mr Murphy unseen by Mr Endon. This

was also the last Murphy saw of Murphy.’

A rest.

‘The relation between Mr Murphy and Mr Endon could not have been better summed up than by the former’s sorrow at seeing himself in the latter’s immunity from seeing anything but himself.’

A long rest.

‘Mr Murphy is a speck in Mr Endon’s unseen.’

(140)

まるで戯曲のト書きのようなことばづかい (“A rest. [...] A rest. [...] A long rest.”)、マーフィー演ずる一人芝居の台本のような書き方が、エンドン氏とのチェス・ゲームを終えたばかりのマーフィーには、ふさわしい。チェスによる対話が、マーフィーとエンドン氏の間には成立せず、そのゲームはふたりがそれぞれ順番に行う「一人遊び」 (“solitaire”) と化し、かえって、他者との対話・通路 (コミュニケーション) の不在を強調する結果になっていたからである。

この一節が、あるいは後年のベケット演劇の萌芽であったのかもしれない。

Kenner は、『ストイックなコメディアンたち』 (*The Stoic Comedians*) と題した研究書の、ベケットを論じた最終第3章を “Comedian of the Impasse” (「袋小路のコメディアン」) と名づけている (Kenner, *Stoic* 67-107)。ベケットは「袋小路」 (“impasse”) に入り込み、行き詰まってしまったとか、ベケットの作品は堂々巡りをしているだけであるとか、否定的な審判を下す批評家もいる。しかし、Kenner は違う。ジョイス後の文学の袋小路に現れ出て、「閉じた集合から要素を選び、それらを閉じた領域内に配列する」 (“[Beckett] selects elements from a closed set, and then arranges them inside a closed field” [Kenner, *Stoic* 94]) という作業を行うこのコメディアンを、彼は高く評価する。

『マーフィー』のチェス・ゲームは、「袋小路のコメディアン」の作業の好例と言えるだろう。文学史上、他に類を見ない、このチェスの場面は、ベケットのみが書き得る、物語の核心を成す力業だった。

袋小路を突き詰めること。ベケットの作品は、終わりから始まり、何度も終わり続ける。終わり、また始まる(再生)。終わりが始まりであり、始まりが終わりであること。あの “the nothing new” の反復・循環。ベケットはその作品群を、死に至るまで、「終わり・続ける」 (“end + on”) ことになる。

最初の小説『マーフィー』は、ベケットの「エンドゲーム」の始まりであり、この作品で、このチェス・ゲームから、ベケットは、「終わり・始める」。マーフィーの「エンドゲーム」は依然として継続中であり、終わり続け、始まり続けているのだ。

1950年代の傑作群のひとつ、小説三部作の最終作 *The Unnamable* (フランス語版1953年、英語訳1958年)の最後を、ベケットは、こう終えている。

...you must go on, I can't go on, you must go on, I'll go on, you must say words, as long as there are any, until they find me, until they say me, strange pain, strange sin, you must go on, perhaps it's done already, perhaps they have said me already, perhaps they have carried me to the threshold of my story, before the door that opens on my own story, that would surprise me, if it opens, it will be I, it will be the silence, where I am, I don't know, I'll never know, in the silence you don't know, you must go on, I can't go on, I'll go on.

(Beckett, *Unnamable* 381-82)

2005

引用・参考文献

- Beckett, Samuel. *Beginning To End: A Selection from the Works of Samuel Beckett*. Adapted by Samuel Beckett and Jack MacGowran. New York: The Gotham Book Mart, 1988.
- . “The End.” Translated from the French by Richard Seaver in collaboration with the author. In *Collected Shorter Prose 1945-1980*. London: John Calder, 1986.
- . *Endgame*. Translated from the French by the author. In *Endgame and Act Without Words*. New York: Grove Press, 1958.
- . “For to End Yet Again.” Translated from the French by the author. In *Collected Shorter Prose 1945-1980*. London: John Calder, 1986.
- . *Murphy*. London: Calder Publications, 1993.
- . *Murphy*. Translated from the English by the author. Paris: Les Editions de Minuit, 1965.
- . *The Unnamable*. Translated from the French by the author. In *The Beckett Trilogy*. London: Pan Books, 1979.
- . *Waiting for Godot*. Translated from the French by the author. London: Faber and Faber, 1978.
- Kenner, Hugh. *A Reader's Guide to Samuel Beckett*. Syracuse, N.Y.: Syracuse University Press, 1996.
- . *The Stoic Comedians: Flaubert, Joyce, and Beckett*. Berkeley: University of California Press, 1974.
- Knowlson, James. *Damned to Fame: The Life of Samuel Beckett*. New York: Simon & Schuster, 1996.

Oxford English Dictionary, The. 2nd ed. CD-ROM, ver. 3.00. Oxford: Oxford University Press, 2002.

Ricks, Christopher. *Beckett's Dying Words*. Oxford: Oxford University Press, 1995.

Taylor, Neil and Bryan Loughrey. "Murphy's Surrender to Symmetry," *Journal of Beckett Studies* Nos. 11 & 12 (1989): 79-90.

フォックス, マイク & リチャード・ジェイムズ. 『完全チェス読本』. 第1巻. 若島正・訳. 毎日コミュニケーションズ, 1998年.